

## 柳田国男と沖縄文化

### —『海南小記』と『海上の道』をめぐって—

並松信久

〔要旨〕柳田国男(1875-1962)の民俗学は、著書『海南小記』(1925年刊)をきっかけのひとつとして、最晩年の著書『海上の道』(1961年刊)で終わる。この二つの著書は、いずれも沖縄文化を対象にしていた。さらにこれらの著書の刊行は、第二次世界大戦をはさんでいるので、二つの比較によって柳田の沖縄観や民俗学の変容を明らかにできると考えられる。柳田と沖縄に関する先行研究は数多くあるが、二つの著書の比較、沖縄に関する情報蒐集や研究交流などに言及した研究はほとんどない。

本稿は、柳田が沖縄に関心をもった経緯、沖縄をはじめとする南島研究の展開、研究者の交流、戦後の「日本」と沖縄を意識した柳田の論考、について考察した。『海南小記』の問題意識の多くが『海上の道』に受け継がれたが、その中心を占めるのは「日本民族起源説」をめぐるものであった。しかし、伊波普猷(1876-1947)をはじめとして多くの研究者が唱える南進説に対して、柳田は北進説を貫いた。この問題は現在でも決着をみていない。

『海上の道』では、実証を旨とする柳田には珍しく、多くの仮説を述べている。例証や事実だけを述べる『海南小記』とまったく異なっていたといえる。柳田は「海上の道」研究を民俗学の成果とは位置づけなかった。柳田は、あえてそれまでの民俗学の手法をとらずに、断定的な仮説を述べることによって、他の多くの隣接科学を巻き込んだ南島研究の発展を願ったようである。

(キーワードは傍線部分)

## 目 次

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1 はじめに    | 2 沖縄文化への関心 |
| 3 南島と研究交流 | 4 沖縄民俗と日本  |
| 5 結びにかえて  |            |

## 1 はじめに

沖縄および南島を対象にした柳田国男（1875-1962、以下は柳田）の代表的な著書は『海南小記』（大岡山書店、1925年）と『海上の道』（筑摩書房、1961年）である。いずれも沖縄が対象になっているというだけでなく、柳田の経歴における節目に刊行された著書という共通点をもっている。すなわち、前者は本格的に民俗学に着手した時と重なり、後者は生前に刊行された最後の著書であり、民俗学研究の集大成といえるものとされている。周知のように、柳田には多数の研究業績があるが、節目に刊行された業績が沖縄に関係しているのは興味深い。さらに『海南小記』は戦前、『海上の道』は戦後と、第二次大戦をはさんでいたので、この二つの著書の比較によって、柳田の沖縄観と同時に、柳田による民俗学の変容も明らかにできるのではないかと考えられる。

柳田は1913（大正2）年に『郷土研究』誌の編集を開始するが、この頃から沖縄文化に関心を寄せていた。実際に沖縄を訪れたのは1921（大正10）年1月のことで、約1ヶ月にわたって沖縄本島・石垣島・宮古島で調査を行なった。この南島紀行をまとめたものが「海南小記」（1921年）という論考であった。この論考に4篇の論考を加えた論文集が『海南小記』（1925年）であった。「海南小記」以後の多くの論考において、日本の民俗を歴史的に考察する広い視野に立って、沖縄の文化および民俗が描かれることになる。そのなかで柳田は一貫して沖縄こそ日本民族の原郷であると考え続けた（この意味で南島は「前日本」であった）。30余年にわたってもち続けたこの仮説が一応の完

結をみたのが、論考「海上の道」（『心』、第5巻10～12号、1952年）であった。この論考に他の論考を加えた著書が『海上の道』であった。

ところで、柳田と沖縄の関係を取り上げた先行研究には、関連する研究も含めて数多くある。そのなかで柳田と沖縄の関係を、直接的に取り上げた主な研究を、年代順にあげれば、高藤武馬「沖縄と柳田国男」（『沖縄文化研究』、第1号、1974年、276～95ページ）；国分直一「柳田国男と「海上の道」」（『沖縄文化研究』、第3号、1976年、229～43ページ）；比屋根照夫「大正末期の思想史的断面—柳田国男と伊波普猷」（『沖縄史料編集所紀要』、第7号、1982年、138～61ページ）；若尾典子「沖縄女性史研究への基礎視角—柳田国男と伊波普猷」（『沖縄文化研究』、第12号、1986年、179～215ページ）；岩田重則「柳田国男の天皇論—民族・稲・沖縄」（『比較民俗研究（筑波大学）』第6号、1992年、82～109ページ）；外間守善「柳田国男の沖縄研究と『海上の道』」（外間守善『沖縄学への道』岩波現代文庫、2002年、168～203ページ）；谷川健一・藤井貞和・赤坂憲雄「座談「海上の道」と南島文化—柳田国男の思想の再検討」（『東北学（東北芸術工科大学東北文化研究センター）』、第6号、2002年、65～83ページ）；村上呂里「宮良當壯と柳田国男の間—言論教育論をめぐって」（『琉球大学教育学部紀要』、第68号、2006年、27～48ページ）；赤嶺政信「柳田国男の民俗学と沖縄」（『沖縄民俗研究』、第26号、2008年、71～96ページ）；酒井卯作『柳田国男と琉球—『海南小記』をよむ』、森話社、2010年；加藤正春「柳田国男の両墓制論—沖縄の葬墓制と両墓制研究」（『沖縄研究ノート（宮城学院女子大学）』、第22号、2013年、1～23ページ）；岡谷公二『『海上の道』論—柳田国男の想像力』（岡谷公二『島／南の精神誌』人文書院、2016年、33～64ページ）などがある。

これらの研究の多くは、柳田が沖縄研究を通して民俗学を形成していったことを明らかにしている。あるいは、沖縄に関わる生活の形態や文化について、様々な視点から柳田の知見を明らかにしている。しかしながら、先行研究の多くは、『海南小記』と『海上の道』とそれぞれ別々に考察される場合が多く、

前述のような柳田の沖縄観や民俗学が変容した点については明らかにされていない。本稿では柳田が沖縄に関心をもった背景から始め、『海南小記』以後の沖縄研究の展開、そして『海上の道』が刊行された戦後における、柳田民俗学の変容について考えていく。

前述のように、柳田は民俗学に関心をもった時期に『海南小記』を執筆し、『海上の道』は柳田の最晩年の著書となり、その学問の総決算であるとされている。しかし、『海上の道』は全体にわたって仮説（問いかけ）が多く、柳田が重要視した論拠がほとんど示されていない。柳田は民俗学の確立をめざしていたはずであるが、むしろ、最後の著書はそれに疑問を呈するような終わり方になっている。この柳田の姿を、文化人類学・民族学の石田英一郎（1903-1968）は「偉大なる未完成」と評し、民俗学の谷川健一（1921-2013）は「柳田のなかに自分の作った学問を自分で始末したいという別の欲望が働いて、日本民俗学をコッパミジンにたたきこわすことに用いられたような気がしてならない」と述べている。<sup>(1)</sup>このことが沖縄とどのように関係しているのか、あるいは、柳田による民俗学の形成において、どのように位置付けられるかが、これまで明らかになっていないように思われる。本稿では、とくにこの点を明らかにしたいと考えている。

なお本稿の引用文中には、不適切な表現が含まれている部分があるが、史実であることを重視して、あえて訂正を加えていない。また引用文中には読みやすくするために、句読点を一部加えた箇所がある。人物の生没年については、可能な限り記した。

## 2 沖縄文化への関心

柳田には『島の人生』という著書がある。1951（昭和26）年9月の刊行であるが、そのなかに「島々の話」という4節からなる一つの章がある。第1節と第2節はいずれも明治期に『太陽』誌において発表された論考であり、第3節は「島の入会」（原題）として1914（大正3）年12月に『郷土研究』

誌に発表され、第4節は「島の人生」(原題)として1924(大正13)年8月に『太陽』誌に発表されたものである。第3節の原題に示されているように、柳田はすでに少なくとも1914(大正3)年に鳥の入会問題に関心をもっていた。その10年後の第4節が書かれた1924(大正13)年は、すでに『海南小記』の旅が終わって、約3年が経過していた。この間に沖縄の歴史、とくに宮古島の歴史に関心をもち、島の生活の厳しさを訴え、沖縄に対する関心がより一層高まっていた。

しかしながら、これ以前に「年譜」によれば、柳田は1907(明治40)年11月頃に笹森儀助(1845-1915、以下は笹森)の『南島探験』を読了し、さらに東京大学在学中の比嘉財定(1886-1917)から、宮古島比嘉村の話<sup>(2)</sup>を聞いていた。この頃から柳田は沖縄に対して何らかの関心をもち、沖縄に関する著書を読んでいた。たとえば、1910(明治43)年の内閣書記官記録課長の在任中に、「沖縄のことを少し調べたいと思って、知人に相談したところ大蔵省の倉の中に、地方から集めた本が非常にたくさんあり、その中に、奄美大島の記録がたくさんあった<sup>(3)</sup>」と記している。さらに1912(明治45)年には石黒忠篤(1884-1960)らから沖縄の話<sup>(4)</sup>を聞いて写真をみせてもらっている。この写真は女性の入れ墨の写真であったが、後の1951(昭和26)年に柳田は民俗学研究所の南島研究会で「私が沖縄に関心をもつようになったのは、女の写真だった<sup>(4)</sup>」と語っている。また、この頃に伊波普猷(1876-1947、以下は伊波)の『古琉球』(沖縄公論社、1911年)が刊行され、伊波から柳田へ3冊寄贈<sup>(5)</sup>されている。

そして柳田は沖縄文化への関心から、多くの人の著書の刊行を通じて沖縄を紹介する。1914(大正3)年刊行の「甲寅叢書」であり、それに続く「爐辺叢書」の刊行であった。それらの刊行について、柳田は後に回顧して、次のように述べている。

「甲寅叢書」の時は非常にペダンティック(学術的)で、名士の道楽仕事みたいところがあったが、「爐辺叢書」の方は、埋もれた執筆者を見つ

けて育てた功績は大きなものであったと思う。今まで本を書くなんていうことは夢にも思わなかった人達が、それでは自分も書いて見ようかという気持になり、各地に謙遜な態度で自分の知っていることだけ書いてみようという考えを持つ人を作ったことは、この叢書のおかげであった。この人達が今日の民俗学を育てる一つの基礎になったのである。琉球のことなどが少しでも日本人の関心に上ったのも、東北地方などの生活が調べる値打のあることだと認められたのも、この叢書によってであった。<sup>(6)</sup>

この叢書に収められた沖縄関係の書籍は、伊波普猷『古琉球の政治』、東恩納寛惇『琉球人名考』、佐喜真興英『シマの話』『南島説話』、喜舎場永珣『八重山民謡誌』、宮良当壮『沖縄の人形芝居』、島袋源七『山原の民俗』、本山桂川『与那国島図誌』の8冊であった。

一方、柳田は1919（大正8）年に貴族院書記官長を最後に、官界を辞し、翌1920（大正9）年8月から東京朝日新聞社客員となった。この転職は、当初の3年間は国内外を旅行したいという願いが聞き入れられての入社であった。最初の旅行は8月早々から、東北旅行で始まった。それをもとに著書『雪国の春』が生まれ、次いで10月に中部地方を旅行して『秋風帖』を執筆した。そして、三度目が九州から沖縄方面への旅行であり、その成果が著書『海南小記』であった。

『海南小記』の自序は、書名とは違和感のある「ジュネーブの冬は寂しかった<sup>(7)</sup>」という書き出しで始まる。この書き出しのきっかけとなる背景は、『海南小記』の題材となる1921（大正10）年の旅行の途中（長崎に立ち寄った際）に、政府から電報で依頼された「国際連盟委任統治委員会」への出席であった。柳田を推薦したのは新渡戸稲造（1862-1933、以下は新渡戸）であった。<sup>(8)</sup>同年5月にはアメリカ経由でジュネーブへ旅立った。委員会に出席した後、いったん帰国するものの、翌22（大正11）年5月にふたたび渡欧して、ジュネーブで冬を過ごした。この滞在中に『海南小記』の執筆に取りかかったということである。もっとも、ジュネーブの滞在は、偶然ではあったものの、沖縄

とまったく無関係というわけではなかった。柳田の宿泊先の近くに、沖縄の言語を研究した旧知の言語学者チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) が居住していたからである (チェンバレンについては後述)。しかしながら、柳田は滞在中にこの旧知に会えなかった<sup>(9)</sup>。チェンバレンに会えなかったことが、前述の『海南小記』の書き出し「寂しかった」の部分に反映されているようである。

ところで、柳田が『海南小記』につながる九州から沖縄方面の旅で、東京を発ったのは1920(大正9)年12月13日であった。翌日は大阪で講演をして、15日に神戸から春日丸に乗船して別府に上陸した。大分から臼杵までは汽車で、そこから先は汽船や小舟を利用して都井岬の突端まで行った。「海南小記の二十九章は、地図の順序であって、自分の旅行の順序ではなかった」<sup>(10)</sup>ので、柳田が訪れた順に『海南小記』の章が構成されているわけではない。その後の旅程をたどると、都井岬から大隅半島を横断し、高須からいったん鹿児島に出るが、「暮の町の混雑を避けて」もう一度、大隅半島に引き返し、佐多岬まで行った。そこで新年の1921(大正10)年を迎えた。沖縄行きは宮古丸に乗船したのは1月4日であり、「翌日は大島名瀬に寄るのだが、この時は町を見学しただけで長く留まらなかった」。前述のように、『海南小記』は本格的な沖縄研究の始まりを告げるものであったが、柳田は、

ただ自分は旅人であったゆえに、常に一箇の島の立場からは、この群島の生活を見なかった。わずかの世紀の間に作りあげた歴史的差別を標準とはすることなく、南日本の大小遠近の島々に、普遍している生活の理法を尋ねてみようとした。<sup>(11)</sup>

と語っている。柳田は旅で表面をたどっただけなので、生活や文化を十分に観察できなかったとしている。そこで、「生活の理法」を考えてみようと思ったという。これ以後、柳田が沖縄や諸島などに対する関心の中心は、一貫して生活の理法となる。

柳田が沖縄・那覇に上陸したのは、1921(大正10)年1月5日であった。

それ以後、約1ヶ月にわたって沖縄本島・石垣島・宮古島で視察を行なった。柳田はこの時の状況を次のように記している。

那覇では人と逢い書物を見る日などが多くて、沢山の旅行はできなかったが、それでも二週間ほどの滞在中に、島袋源一郎君に援助せられて国頭の山に入ってみた。今帰仁の諸喜田と、大宜味間切の塩屋浦と、久志の瀬高とに各一泊して、草鞋もはきくり舟も試みた。その他はただ首里付近の村の一日の逍遥だけで、東西の離れには渡ってみることができなかった。<sup>(12)</sup>

あまり多くの場所を見て歩くことはできなかったものの、人と会い書物をみたという。当時、伊波が沖縄県立図書館の館長であったので、図書館に行って沖縄の資料を漁ると同時に、伊波と沖縄研究について話し合った。この時、柳田は伊波を通して沖縄文化に触れると同時に、伊波に『おもろさうし』の校訂をするよう勧めた。<sup>(13)</sup>

柳田はこの時、沖縄研究において重要な役割を果たすことになる比嘉春潮(1883-1977、以下は比嘉)とも出会った。出会ったのは柳田が宮古島へ行く途中であったが、比嘉のほうはやや複雑な事情を抱えていた。<sup>(14)</sup>この時のことを回想して、柳田は次のように書きとめている。

大正十三年から昭和五年までのふるい日記を出してみると、いちばん度々出て来る名前は、琉球出身の比嘉春潮君であつた。(中略)はじめて会ったのは大正十年一月のことである。沖縄本島をほぼ視察し終って、宮古、八重山へ行こうとして船に乗ったら、県の地方課の役人であるのに、その船に偶然乗り合わせていたのだった。どうしたのだと聞いてみると、県の役人をしながら、中央でアナーキストとして知られていた岩佐作太郎<sup>いわさきくたろう</sup>と交際していた。しかもその岩佐が来島するといつて来たので、県当局が気をきかし、比嘉君に、宮古島の選挙の模様を見て来いとか何とか、用事をこしらえて出張させてくれたという話で、その宮古島へ渡るときだったのである。そのうえ比嘉君はローマ字会の会員だった



りしたので、リベラリストだということで、知事に叱られたりしていた様子であった<sup>(15)</sup>。

柳田と比嘉は偶然に出会ったが、その後、研究会などを通して、二人の親交が長く続いた。

柳田は宮古島へは一昼夜で往復しただけであったが、石垣島には5日間滞在して、御嶽（沖縄全域にみられる村落祭祀の中核となる聖域の総称）を訪れた。2月2日に宮古経由で那覇に帰ってからの1週間は「主として日返りの田舎を一人であるき、ある日は斉場御嶽に詣でて久高を望み、知念小学校の新垣孫一君からその島の話聞いた」。9日に名瀬まで帰って、「見物したのは瀬戸の南北の二島だけであったが、山を行き海を越え、大小さまざまな船にのって、苦しいかつ変化ある数日を過ごし」、15日に鹿児島に帰った。帰京したのは3月1日であった。

帰京後まもなく『東京朝日新聞』紙上で、1921（大正10）年3月29日から4月30日までの25回と5月3日から20日までの7回、計32回にわたって、「海南小記」と題して南島紀行が連載された。これに4篇を加えて、『海南小記』が出版されたのは、前述のように1925（大正14）年であった（単行本にするにあたって、字句にかなり手を入れたようである）。『海南小記』の内容は、主に沖縄の民俗についてであったが、単に現時点での生活の形態や文化を語っていたのではなかった。柳田による沖縄文化の研究は「歴史」的な背景と「本土との交流」を明らかにしようとする特徴をもった。柳田の郷土研究ないし民俗学は、生活文化の発生と変遷を明らかにすることであったので、歴史を常に問うという姿勢がみられたからであった。とくに、柳田にとって沖縄の歴史を考える際に、本土との関係をたどることが重要な意味をもった。

以下において、『海南小記』の記述をたどってみる。「海南小記」は二十九の見出しで構成されるが、最初の十二までは、前述の沖縄に至るまでに立ち寄った九州地方と奄美群島の伝承であり、十三以降が沖縄の伝承である。とくに「遠く来る神」・「はかり石」・「二色人」などの見出しで、沖縄の信仰と

古代日本の信仰との脈絡について語る。エライ神加奈志や大島のナルコ神テルコ神など「遠く来る神」に言及し、われわれの空想にも何か具体的な飛び石のようなものを必要としたのではないかという。「はかり石」では、島々のいたるところで石敢当<sup>せきかんとう</sup>がみられるが、八重山のイシガントウ・ビジュルや宮古の文字のない石などとともに、石占や雨乞いのハカリ石の範ちゅうに位置づけている。「二色人」では赤又と黒又という二神をニイルピトとよび、信仰の対象とし、二神は天に続いた地平線の向こうから、浜に上陸したという昔語りがあるという。

単行本にする際に付け加えられた論考の4編については、一つ目の「与那国の女たち」(初出は「与那国噺」『太陽』、第27巻4号、1921年)では、与那国の女性や生活に関する感想を述べた後、

われわれはかつて大昔に小船に乗って、このアジアの東端の海島に入りこんだ者なることを知るのみで、北から次第に南の方へ下ったか、はたまた反対に南から北へ帰る燕の路をおうてきたものか。今なお民族の持ち伝えた生活様式から、も一つ以前の居住地を推測する学問が進まぬためにいかなる臆断でもなりたちうようであるが、少なくともこれらの沖の小島の生活を見ると、それはむしろ物の始めの形に近く、世の終わりの姿とはどうしても思われぬ。すなわち大小数百の日本島の住民が、最初是一家一部落であったとする場合に、与那国人の今日の風習が、小島に<sup>すば</sup>窄んだからこうなったと見るよりも、やまとのわれわれが大きな島に渡った結果、今日の状態にまで発展したと見る方が、はるかに理由をしやすいように思われる。<sup>(17)</sup>

と語る。柳田は与那国での体験から、北進説を唱えるようになる。

二つ目の「南の島の清水」(初出は「南の島の清水」『国粹』、第2巻5号、1921年)では、沖縄に伝わる天人女房譚をとりあげ、泉で身を浄めている天女を垣間見て、その衣を奪うというモチーフを分析して、物忌みをする神女に世俗的な権力が優越するようになった歴史的背景を読みとっている。ま

た沖縄諸島の神女の話と比べて、やまとの島の泉にまつわる話には、弘法大師と老婆とのやり取りが多く、彩色がくすんでいるという。さらに三つ目の「炭焼小五郎が事」（初出は「炭焼長者譚」『朝日新聞』、1921年1月1日～15日、7回の連載）では、長者となる貧しい夫が炭焼きであったという筋の長者譚が、沖縄と宮古には存在するが、中世京都付近の物語にはみられない。しかし、この長者譚は全国的に広範にみられ、岩手でも伝承されていることを明らかにし、炭焼のモチーフが宇佐の火神信仰に由来するのではないかという仮説を立てている。

四つ目は「阿遲摩佐の島」（久留米市中学明善校における講演）である。これは1921（大正10）年2月21日の講演原稿を骨子にして、1923（大正12）年以後に加筆された論考である。沖縄はもとより九州でも神木とみなされているコバ（クバ）が、古くはアジマサとよばれていたこと、古代の宮廷では牛車を飾るのに用いられたほかに、コバ扇が皇室の内膳司では御飯をあおいでしますのに用いられたこと、山伏修験者が護摩の節には篋篋扇（蒲葵扇）をあおいで火をおこしたことなど、について述べ、コバが古くから日本民族の親しんだ植物であることを説明する。コバの植生の北限が紀州あたりであって、九州以北には少ないにもかかわらず、日本民族がコバに親しんできたことを強調する。

さらに、柳田はこのコバに注目して、

コバの木の分布と保存に、神が参与してお出でることを知るためには、どうしても沖縄の島々を見てあるかなければなりません。もとは異国のごとく考えられたこの島の神道は、実はシナからの影響はいたって少なく、仏法はなおもってこれに対して無勢力でありました。われわれが大切に思う大和島根の今日の信仰から、中代の政治や文学の与えた感化と変動とを除き去って見たならば、こうもあっただろうかと思う節々が、いろいろあの島には保存せられてあります。<sup>(18)</sup>

と説明する。コバを通して島々の信仰をさぐることによって、大和島根では

すでにみられなくなった神道の古い姿を明らかにすることができるという。沖縄の信仰は、中国からの影響も少なく、仏教の影響も受けていないので、もともとの神道の姿を映し出しているという。柳田は、

かくのごとく長たらしく、コバとわが民族との親しみを説きますのも、畢竟はこの唯一の点をもって、もとわれわれが南から来たということ(19)を、立証することができはしまいかと思うからであります。

と強調する。柳田はコバの由来から日本民族が南から北へ移動したという推定のひとつの証としたいと考える。日本民族が沖縄を経て北進したのではないかという見通しは、前述のように「与那国の女たち」ですでに示唆していたことであるが、信仰についてもそれを示唆しているのではないかという

その後も柳田は「海上文化—東京高等商船学校講演」(1940年)において、宮古や与那国などで、

言語でいふならば日本人の古く使つた言葉を使ひ、信仰で申せば日本人が古く行うて居つた様式で神様を拜んで居るのである。例へば女を中心に女に祭の役をさせ、男がそれを仲介者として外側で合同して祭る。日本の一番古い信仰形式、言語様式をその儘保存して居る。それ故に私は今日の大和民族はもと南の方から来たといふこと、その南から来た仲間を少しづつ、途中の島に残しながらこつちへ上つて来たやうに思つて居(20)る。

と語る。柳田は日本の最も古い信仰形式が沖縄に遺っているのは、日本民族が南から北へ移動したからではないかと考える。柳田の「日本民族起原説」は、宝貝を求めて大陸から稲作民が南島に渡来したのであらうと説いた著書『海上の道』(1952年)において改めて提示される(後述)が、沖縄民俗に対する接近法が明示された最初の論文が「阿遅摩佐の島」である。もっとも、『海南小記』では宝貝を日本人渡来の動機として考えていなかった。宝貝については、国際連盟委任統治委員として渡欧していた時に、ドレスデン博物館においてヨーロッパでも貝が使用されていたことを知り、「この貝は地中海には

ないから、どこか遠くから持ってきたものであろうが、どういう経路で運ばれたものであろうか<sup>(21)</sup>という疑問をもち、それが戦後になって顕在化するという経緯をたどることになる。

一方、沖縄の信仰と同時に、言語についても、『海南小記』の自序で、「新しい民俗学の南無菩提のために」、同書を「ベシル・ホール・チェンバレン先生の、生御魂<sup>みたま</sup>に供養したてまつる」と記し、チェンバレンが唱えた学説に賛同している。しかし、チェンバレンは「日本語と琉球語」の類洞の由来を、日本民族の南進で説明した。チェンバレンは柳田の北進説とは異なり、言語の面から南進説を唱えた。チェンバレンは日本語の系統論の研究を行なったが、1893（明治26）年に沖縄を訪れ、約1ヶ月にわたって言語や民俗の調査を行なった。そして翌1894（明治27）年に琉球語が古代の日本語と共通性をもち、中国語の一分派ではなく、日本語と同系であると発表した。チェンバレンは『日琉語比較文典』（山口栄鉄編訳、琉球文化社、1976年）などを遺したが、沖縄と本土の文化が同根であることを、言語学の観点から説いた。柳田も『海南小記』において、沖縄と本土との文化が同根であること、沖縄の人びとと本土に住む人びとが「同じ血をわけた」同胞であることを繰り返し説いた。つまり、チェンバレンと柳田は、沖縄と日本の文化が同根である点は一致していたものの、チェンバレンは南進説、柳田は北進説という違いがあった。

周知のように、この『海南小記』から大きな影響を受けたのは折口信夫（1887-1953、以下は折口）であった。柳田は1921（大正10）年の「三月六日、折口信夫宅の小集会で沖縄<sup>(22)</sup>の話」をした。沖縄の旅から帰ってきて、わずか5日後であった。とくにノロ（祝女とも表記され、村落祭祀を司る女性祭司の長）のこと、ニライカナイ（村落祭祀の儀礼で表現される世界観のなかで、人間の住む世界と対比される他界あるいは別世界）のことなど、沖縄の宗教や信仰の話は、折口に大きな刺激を与えた。折口は早速この年の7月に沖縄の旅に出て、その旅行<sup>(23)</sup>の記録を残した。そして翌1923（大正12）年11月の「南

島談話会」(後述)において「琉球視察談」を語った。こうしていわゆる折口学の根底には、沖縄の宗教や信仰が下敷きとなった。さらに1924(大正13)年には「沖縄の宗教」(『世界聖典全集』外纂)を発表し、これが「日本文学の発生のまとまる導きになった」と語っている。折口は「沖縄の宗教」のあとに「此短い論文は、柳田国男先生の観察点を、発足地としてゐるものである事を、申し添へて置きます」と断り書きを入れて、柳田の影響が大きかったことを述べている。1923(大正12)年の夏にも、折口は三上永人(1897-1969)とともに、沖縄から先島へかけて探訪の旅に出かけ、台湾まで行っている。この時も「沖縄探訪記」という詳細なノートを残した。

### 3 南島と研究交流

柳田は沖縄で伊波に出会って以来、伊波の学問的方法に影響をあたえた。当時の心境について、伊波は以下のように記している。

恰度其の頃、柳田国男先生が沖縄にやつて来られて、学界に対する義務として、多年研究した『おもろさうし』の校訂をするように慫慂されたのは、私の一生に取つて忘れることの出来ない大事件だと思ひます。この刺戟によつて私はもとの学究に立帰る決心をしました。そしてオモロの校訂中に、私の研究熱は再燃して、その完成する頃には、私は再び純然たる一学究になつてゐました。<sup>(24)</sup>

この出会いは柳田が一方的に伊波に影響を与えたというものではなかった。日本民族の起源を探り続けていた柳田と、沖縄文化の起源を探究していた伊波とで学問的に交流するという意味をもっていた。<sup>(25)</sup>伊波は1924(大正13)年12月に沖縄県立図書館長の職を辞し、翌1925(大正14)年2月に校訂作業を終えた『おもろさうし』を携えて上京した。伊波は柳田にオモロ研究を促されて、研究者として再出発するつもりでいた。

柳田は伊波に対してオモロ研究の完成を期待したが、伊波のねらいはオモロ研究を手がかりにして、沖縄文化総体の解明に向かった。伊波のねらいは

柳田の意図と異なっていたものの、伊波は史料の欠落している時代の解明にあたって、史料不足を補うために柳田の民俗学的方法を活用した。柳田の方法とは、ある地域のある時代の史料が欠落している場合、他の地域の同時代の史料を参考にして、不明な点を予測するというものであった。たとえば、伊波による『おもろさうし』の研究は、その史料のみで進展が図られるものでない。沖縄古代社会の構造に関する研究と不可分の関係にあり、それを並行して行なわなければ、『おもろさうし』は解明できない。しかし、沖縄古代生活に関する史料が皆無に等しいことから、伊波は柳田の民俗学的手法を用いて、他地域の古代生活の史料から沖縄古代生活の解明をめざした。

このような経緯で柳田と伊波は学問的手法が似通ったものとなったが、至った結論は正反対といえるものであった。柳田は『海南小記』や『海上の道』において「日本文化北進説」を唱えたが、伊波は著書『日本文化の南漸』において日本文化南進説を唱えた。伊波と柳田は同じ『仲里旧記』という久米島の史料を使用していたにもかかわらず、その結論はまったく逆であった。しかし、柳田と伊波は北進か南進かで異なっていたものの、日本と沖縄は同じ祖先をもつ「日琉同祖<sup>(26)</sup>」という点は共有していた。もともと、沖縄と日本というように対置してとらえると、中国の帰属問題や対立の図式など、政治色の強い問題が生まれる可能性をもった。それを察した柳田は、1921（大正10）年以降の沖縄研究にあたって、政治色があると判断した「琉球」や「沖縄」という名称はできるだけ避け、さらに奄美群島を包括するという意味を込めて、価値中立的で文化的なイメージをもつ用語として「南島<sup>(27)</sup>」を使った。

柳田は『海南小記』の「自序」において、

海南小記のごときは、いたって小さな詠嘆の記録にすぎない。もしその中に少しの学問があるとすれば、それは幸いにして世を同じうする島々の篤学者の、暗示と感化とに出でたものばかりである。南島研究の新しい機運が、一箇旅人の筆を役して表現したものというまでである。<sup>(28)</sup>

と記した。柳田は南島という言葉を使って、政治色を弱めた民俗学研究を願っ

た。こうして沖縄を包括した南島研究の新しい機運が高まっていった。その研究成果として、柳田は『海南小記』の「付記」において、主だった著書を掲げている。<sup>(29)</sup>それを順に列挙すると、伊波普猷『古琉球』『古琉球の政治』『沖縄女性史』『おもろ選積』、真境名安興・伊波普猷『琉球の五偉人』、真境名安興・島谷竜治『沖縄一千年史』、佐喜真興英『南島説話』『シマの話』、宮良当壮『沖縄の人形芝居』、島袋源一郎『国頭郡誌』、坂口徳太郎『奄美大島史』、比嘉徳『先島の研究』、岩崎卓彌『ひるぎの一葉』、喜舎場永珣『八重山民謡誌』、笹森儀助『南島探験』、本山桂川『南島情趣』『与那国島図誌』であった。

ところで、前述のように、柳田と沖縄で偶然に出会った比嘉は、伊波と同様、柳田の影響を受けた。しかし、伊波とは異なり、研究を志すというよりも、社会主義運動に対する関心のほうが強かった。比嘉の社会主義運動に対する関心は、上京後も続いたが、その傍らで比嘉は柳田を訪ねた。後に比嘉は沖縄の民俗研究の動向をまとめ、それを三期に分け、柳田の来島がひとつの区切りであったとしている。<sup>(30)</sup>第一期は古代から1879（明治12）年の廃藩置県までの時期で、内外で民俗資料が記録された時期である。主な資料は、首里王府が施政上の必要から編集著述した史書や由来記類などである。さらにこれらの資料だけでなく、中国、日本、ヨーロッパなどの文献に著された民俗に関する記載も含まれる。そしてこれらの民俗資料の背景にあるのは、「沖縄をひとつの国として扱っている」という考えであった。

第二期は1879（明治12）年の廃藩置県から1921（大正10）年頃までの時期である。沖縄が「日本のひとつの県」となり、研究は沖縄の滞在者や沖縄在住の研究者によって着手される。たとえば、外来者では、田代安定（1857-1928）の調査報告や論文、田島利三郎（1869-1931）や加藤三吾（1865-1939）らによって『人類学雑誌』へ投稿された調査報告、笹森儀助（1845-1915）の『南島探験』、一木喜徳郎（1867-1944）書記官の『沖縄県取調書』などであった。<sup>(31)</sup>一方、沖縄在住の研究者では、友寄喜直の「琉球における盲信、俗伝および児童語」（『人類学雑誌』）、伊波の『古琉球』や『沖縄女性史』、島袋源一郎



(1885-1942) の『沖縄県国頭郡志』などがあつた。これら第一期と第二期の資料や研究は、主に政治の中心である首里と那覇を対象にしたものが多いという特徴があるとともに、奇習異俗に焦点があてられたものが多いという特徴をもっていた。

第三期は1921(大正10)年の柳田の来島をきっかけに、学界レベルで沖縄民俗への関心が高まり、本格的な調査研究が行なわれた時期である。比嘉によれば、柳田の来島は大きな意味をもち、それまで沖縄で蓄積された資料や研究業績を、民俗学という枠組みで整理するきっかけを与えたという。柳田は沖縄から帰京した後に、1922(大正11)年に「郷土会」のメンバーに在京県人を加えて、「南島談話会」を設立した。これによって南島民俗に関する共同研究が始まり、中央の学界における沖縄研究のきっかけとなった。

柳田は1922(大正11)年の沖縄・奄美を対象とする研究会を発足するにあたって、沖縄や研究という言葉を避けて、南島談話会という名称を使った。南島談話会には郷土会のメンバー以外に在京県人が加わつた。柳田は中央学界における沖縄研究の機運を盛り上げる一方で、沖縄研究に対して南島研究という枠組みを与え、前述のように政治的な特色をできるだけ排除し、民俗的・文化的な色彩が出るように考えた。もっとも、比嘉が上京した1923(大正12)年には、柳田は国際連盟委任統治委員となってジュネーブへ赴任するので、日本を留守にしていた(この年の関東大震災の後、柳田は11月に急きょ帰国する)。帰国後、柳田は1924(大正13)年に「南島研究の現状」と題する講演を行ない、翌1925(大正14)年に『海南小記』を発表する。結局、南島談話会は1922(大正11)年4月から1933(昭和8)年5月まで開催され、不定期に24回の会合がもたれた。この会合には約20名の在京県人が参加したが、比嘉は「大正11～12年から昭和8～9年にかけて学界の沖縄民俗研究は非常に盛んなものだった」と語っている。比嘉は南島談話会の主要メンバーとなり、柳田の民俗研究に対する情報提供者として大きな役割を果たした。

もっとも、比嘉は上京後すぐに南島談話会に参加したわけではなかった。

参加したのは伊波の上京後であった。前述のように、伊波は1926（大正15）年に校訂作業を終えた『おもしろさうし』を携えて上京した。比嘉はこの伊波の「お伴をして柳田邸を訪問した。それ以来、しげしげと足を運ぶようになった<sup>(32)</sup>」のであった。伊波と比嘉はともに、この年から南島談話会に参加するようになった。そして1927（昭和2）年の例会には、伊波や比嘉の他に、金田一京助（1882-1971）、富名腰（船越）義珍（1868-1957）、金城朝永（1902-1955、以下は金城）、岡村千秋（1884-1941）、島袋源七（1897-1953）、そして社会主義運動家の仲宗根源和（1895-1978）らが加わった。この年以降、比嘉と金城が南島談話会の常任幹事となり、後に金城は『南島談話』誌（1931～32年）の編集を担当する<sup>(33)</sup>。南島談話会は1928（昭和3）年2月から1931（昭和6）年6月まで一旦中断し、同年7月に再開した（この再開時に『南島談話』誌の隔月発行が決められた）。比嘉によれば、南島談話会は「たいてい柳田先生が題を出し、言葉のこととか、習俗のこととか、みんな自分の知っていること、研究していることを話した。時には先生が沖縄と他の島々のことを比較して話されるなどして<sup>(34)</sup>」という形で進められた。

とくに、当時の柳田は農村・地方文化の代表的な事例として沖縄をみていた。『海南小記』の刊行と同年（1925年）に、柳田は「地方文化建設の序説」のなかで、

沖縄の窮乏のことは広く報ぜられるところであるが、これは又直ちに日本全体の地方の状態を語るものである。沖縄窮乏の原因は、単に天災をもって充つことは出来ぬ。遠くは中央都市の搾取と、その政策の責とであり、近くは、沖縄それ自体の支配階級の消費過多によるものである。彼等は生産の母たる島人より、取るべき総ての物を搾り取った。もはや、とるべき何者も島人の懐に残ってゐない。彼等は既に、文字通り餓死の境に臨んでゐる。と同時に彼等を支配してゐた地主も資本家も、税金によって維持される官庁も破産にせまってゐる。実に、これは理の当然と言はなければならぬ。（中略）将来経済的に破滅する国家があったならば、

恐らく沖縄の如き状態をもって暗き滅亡の淵へ歩み寄るのであろう。がそれは又、日本その者の状態でもあるのだ。<sup>(35)</sup>

と記した。1920年代に入って農村の疲弊と窮乏が深刻化し、関東大震災（1923年）による都市の瓦解が重なり、全国各地を不況の波が襲った。沖縄の「ソテツ地獄」に象徴される経済的破綻と窮乏が、全国各地でみられた。柳田は国家体制への危機意識をもち、農村・地方文化の再建を提唱し、都市中心に起こっている消費文化の膨張に警鐘を鳴らしていた。その原点には沖縄そのものの崩壊・破滅という事態があったといえる。

柳田は1925（大正14）年9月に「南島研究の現状」と題する講演を行なっているが、その冒頭で関東大震災に触れている。

大地震の当時は、私はロンドンにいた。（中略）或一人の年長議員は、（中略）これはまったく神の罰だ。あんまり近頃の人間が軽佻浮薄に流れていたからだと言った。私はこれを聴いて、こういう大きな愁傷の中ではあったが、なお強硬なる抗議を提出せざるをえなかったのである。本所深川あたりの狭苦しい町裏に住んで、被服廠<sup>ひふくしょう</sup>に逃げ込んで一命を助かろうとした者の大部分は、むしろ平生から放縦な生活をなしえなかった人々ではないか。彼らが他の碌でもない市民に代って、この惨酷なる制裁<sup>(36)</sup>を受けなければならぬ理由はどこにあるかと詰問した。

柳田が地方文化の再建を訴える根本的な要因は、この詰問にある。社会の底辺にある「常民」が多くの被害を受け、放縦・消費に明け暮れる人びとが生き残る。これは天の罰ないし天災であるといえるのか。柳田の詰問は、事態の救済や解決などを検討しない風潮と、政府の施策に対して向けられる。柳田の詰問は沖縄の現状に対しても、

沖縄最近の窮状の、主たる原因は社会経済上の失敗である。誤りまたは故意に巧んだ人間の行為が、積み積ってこの痼疾<sup>こしつ</sup>をなしたことは事実である。しかもその誤りをあえてした者は、げんに今最も多く苦み悩んでいる人でないのみならず、彼らの親たちや友人ですらもなかったのでは

<sup>(37)</sup>  
る。

ここでいう「誤りをあえてした者」とは、沖縄の為政者・有産者・外来資本家・商人などのことである。沖縄こそが柳田のいう「破滅する国家」の縮図であった。さらに柳田は「大規模なる世界の沖縄島」と表現して、国家像再生の原点には沖縄の存在があり、その思想的意味が措定されている。<sup>(38)</sup>その再生の一点にすべきであると考えて、「南島研究の現状」の講演では、沖縄出身者による研究業績を紹介し、沖縄は「学問上の未開拓地」とし、沖縄研究の文化史上の重要性を訴えた。

この一方で、柳田の影響を受けた伊波は、頻繁に「南島」という言葉を使用し始める。伊波はそれまで南島という用語をまったく使用しなかったわけではなかったが、その使用頻度は柳田との交流が始まった時期以降に、格段に高まる。伊波は1926（大正15）年に著書『琉球古今記』について、

この書に収めた十数篇は、私が一個の南島人として、主に内部から南島を観たもので、いはゞ南島人の精神生活の一記録ともいふべきものです。<sup>(39)</sup>  
と語る。伊波は自らを南島人とみなすと述べ、南島という言葉を使用し、自らの論考や著書の表題にも使用する。しかし、伊波が柳田のいう南島の枠組みをそのまま受け入れたわけではなかった。柳田のほうは、いわば南島という事物の対象化に終始すればよかったが、伊波のほうは柳田とは異なり、対象化されるもの自体に含まれていたからである。沖縄を離れて上京し、沖縄を外から眺めるようになったとはいえ、伊波には対象化されるもの自体から逃れられないという複雑な思いがあった。それは沖縄から南島という言葉に変わったとしても同じであった。

伊波が南島研究に転じた後、研究姿勢にも変化が生まれる。その変化は二つあった。<sup>(40)</sup>一つは琉球を傍系とする意識の発生であり、もう一つは琉球の独自性よりも、日本との共通性を探ることへと重心が移ったことであった。たとえば、伊波はすでに論考「日本文学の傍系としての琉球文学」と著書『孤島苦の琉球史』の表題で掲げていたが、日本語を「国語」と表現するようになっ

た。伊波は図書館長時代に琉球史料を蒐集して、琉球研究の基礎を築いたと自負していたが、上京後はこの研究史料をもとに、国語を基準にして琉球語を考えるという姿勢をとった。伊波は、琉球語は国語と同語根であると語り、それゆえにオモロ研究もそれほど難しいことではないとさえ述べている。

伊波は言語だけでなく、南島人も日本人の傍系と位置づける。南島人には本来的に日本人として表象されない野蛮、未開、そして生蕃も含んでいた。伊波は日本人として表象されない領域も、南島人の範ちゅうに入れている。伊波はそれまでの琉球個性論（日琉同祖論と表裏一体の関係にある）をふまえて「南島人とは、「日本人」であって、かつ「日本人」ではないのであり、「日本人」でありながら「日本人」に翻訳されない領域を抱え込んだ存在<sup>(41)</sup>」というとらえ方をした。伊波は、

単に本土と同じ流れであるといふ事の説明だけでなく、一つでも多くさうした古い民俗や言語が残つてゐはしないか、といふ事を探り出すのが、吾々の琉球研究の主眼でなくてはならない。<sup>(42)</sup>

と語る。伊波にとって琉球研究は、本土の研究に対して材料を提供するだけにしかすぎないものとなってしまう<sup>(43)</sup>。当時の伊波の研究は、主に本土との共通性の探究と、本土研究の手段としての琉球研究を行なったといえる。こうして琉球研究は柳田が提唱した比較研究という方法を取り入れる一方で、柳田が中央で研究するための材料を提供するだけのものにすぎなくなる。そしてこのことを通じて、柳田による民俗学の研究体制（中央にいて地方の情報を集める体制）のなかに組み込まれていく<sup>(44)</sup>。もっとも、これによって柳田は民俗学の体系化をめざしたわけではない。柳田による研究は「地方学」「郷土研究」「民間伝承論」と名称を変え、民俗学はそのひとつであるにすぎないものと認識されていた。

ところで、伊波にその転向を迫った沖縄の経済的困窮について、柳田は地域的特性にその根源を求めた。柳田はそれを「孤島苦」ととらえる。那覇の松山小学校で「世界苦と孤島苦」という題目で講演しているが、それを後に

回顧して、

世界苦というのは他にもお連れがあるから、皆と一緒につき合って行っているが、この孤島苦の方を沖縄の人が気付かないようでは駄目だ、沖縄県でも自分の村の仲間のうちの一つ低いものを軽くみるようでは駄目だということを、可なり強い言葉で話したのである。すると大体の人は皆一様にちょっと嫌な顔をしたが、それ以来沖縄には、複雑な内容と気持<sup>(45)</sup>をもった孤島苦という言葉が行亘っているらしい。

と語っている。さらに柳田は、この孤島苦を引き起こしている原因は何かを考える。

柳田は、一般に語られる重税説を批判しつつ、孤島苦をもたらした原因について、

税は新しい時代になつて確かに軽減せられたが、尚之に代つて特殊なる商事機関が働き、個々の直接生産者の利益は其為に大に殺がれた。沖縄本島でいふならば鹿児島大阪から来た商人の店、又は之を援助して分前に与かつた那覇などの利口者である。彼等は常民よりも一段すぐれた才能と、大きな資本の力とを武器として、愚鈍なる同島人の生産に余分に食ひ込み、彼等を窮乏せしめずんば止まなかつたのである。官庁巨商其他の有力者は、之に伴うて許さるる限り自由なる消費をした。其消費の中には学校とか書籍とかの如き、新文化の生活に必要な欠くべからざるものも勿論多かつたが、其以外にも食料飲料衣料などの、島の乏しい生産物と交易して輸入せられる品物が、いつでも輸出を超えて居たので、久しきを経てそれが集積し、終には以前の消費階級までを引つくるめて、<sup>(46)</sup>共々に没落の淵に沈めようとするのである。

と語る。柳田によれば、孤島という地域的特性によって過剰消費が起こる。したがって、差別意識などによって島内で利害対立が起これば、島外勢力と連携した者が島内の勝者となる。このような結果となってしまうのは、元々孤島という状態にあるからだと説明する。

柳田による説明の影響を受けて、伊波は沖縄の地域的な特性を強調した『孤島苦の琉球史』（1926年）という著書を刊行した。伊波は「孤島苦」の原因には遠近二つがあるとして、近い原因に「支配階級の消費過多」、遠い原因に「中央の搾取とその政策」、すなわち、沖縄の租税政策をあげる。<sup>(47)</sup> 租税の問題を取り上げる論者は、当時の沖縄には多かったが、伊波は本土よりも相対的に過重な租税負担の問題を批判し、政府の財政援助を求める政策論を訴える。<sup>(48)</sup> 同じ沖縄の根深い問題を扱っているものの、柳田はどちらかといえば、一般論に立って地域的特性を入れるという論理構成をとる一方で、伊波は過剰消費という一般論よりも、孤島という地域的特性のほうを強調するという特徴をもっていた。

伊波の最後の著書というべき『沖縄歴史物語』（1947年）の結びには、

ただ地球上で帝国主義が終りを告げる時、沖縄人は「にが世」から解放されて、「あま世」を楽しみ十分にその個性を生かして、世界の文化に貢献することが出来る、との一言を附記して筆を擱く。<sup>(49)</sup>

と記されている。伊波によれば、沖縄の将来を考えた場合、沖縄を過酷な状況に陥らせた根源を取り除かなければならない。その根源とは帝国主義であった。秀吉の帝国主義であり、大日本帝国の帝国主義などであった。伊波のいう「あま世」の形成は可能かどうかは不明であるものの、伊波は『おもしろさうし』の表現を用いて、沖縄の個性を生かして沖縄の将来を展望しようとした。<sup>(50)</sup> しかし、伊波は帝国主義を否定しているものの、柳田と同様、沖縄を含む日本という意識は、戦後になっても持ち続けた。<sup>(51)</sup>

柳田は後年、著書『郷土生活の研究法』において、自らの学問を「新たなる国学」と規定した。そしてこの新たなる国学によって、沖縄は日本文化（民族）の原基的存在として把握され、「我々の学問にとって、沖縄の発見ということは劃期的の事件」<sup>(52)</sup> であると語る。柳田のいう沖縄の発見とは、沖縄的個性の発見に他ならないが、それは南島談話会などを通じて、比嘉によって提供された経験や事実に基づくものであった。個性という点では、比嘉は伊波

から大きな影響を受けていた。しかしながら、比嘉によって解釈された柳田と伊波の説には異なる点がみられる<sup>(53)</sup>。比嘉によれば、伊波は沖縄人を総体でとらえて、その個性を強調するが、これに対して、柳田は沖縄内の中央集権体制下で個々の島の個性に注目しているという。比嘉は、

柳田は伊波の『古琉球』その他を見て、すぐに沖縄人が日本民族であり、沖縄が古語古俗の博物館であることを知り、沖縄研究を提唱し、第一に着手した。しかし琉球入り後の沖縄の苦難については深い同情を持ちながらも、その持論である、地域的關係から中央の文化の及ばない山村や島嶼民の苦難と相通ずる、いわゆる「孤島苦」であるとし、伊波の「沖縄歴史の趨勢」も、「王朝時代、藩制時代を経て明治になった当座の明るくなった気持ちを主として書こうとしたのではないかと思う」（『故郷七十年』）といい、伊波と会っての話は、おもしろや民俗が中心であった<sup>(54)</sup>。

と語っている。

比嘉は、伊波については、あくまで日本全体の中央と地方との関係で沖縄を位置付けているとしている。これに対して柳田については、柳田の著書『故郷七十年』から引用して、

沖縄の文化には中心があるから、それをはずれると、割引をしなければならぬような喰違いがどうしても免れられない。私の知り合いの比嘉春潮君などは珍しくそういう偏頗のない人だが、多くの方はみなその癖もっていて、「何島だからねえ」というようなことをすぐいう。八重山とか宮古島とかいう、割に大きな島でも特殊扱いされていたのだから、もっと小さな離島は、かなり別扱いされていたに相違ない。（中略）他の離島にいたっては、非常に低く見られる傾きがあった。それが私共が沖縄研究に奮起した原因と、隠れた心理の動機だったともいえる<sup>(55)</sup>。

という箇所を取り上げて、柳田は沖縄内での中央集権体制を問題にして、個々の島における個性を強調しているという。沖縄出身の伊波は、日本に対する沖縄として、沖縄を総体でとらえる傾向をもち、それに対して東京出身の柳



田は、各地方の民俗をできるだけ詳しく調べるという観点から、個々の島の個性に注目するという特徴をもっているという。

もっとも、比嘉は伊波と柳田の違いを際立たせて、批判しているというわけではない。重要なことは、沖縄民俗に関する情報提供者である比嘉が、伊波と柳田の両者に対して、もの足りなさを感じていることである。伊波に対しては、沖縄のなかにおいて虐げられた人びとに対して配慮が足りないのではないかという点、さらに伊波のいう日本への同化という方向性に疑問を感じているという点であった。柳田の前述の「孤島苦」への関心は、確かにこの伊波の欠如を補っていた。しかし柳田に対しても、虐げられた人びとの生活や文化について、ありのままの「事実」の表現だけで良いのだろうかという疑問をもっていた。さらに柳田に対しては、伊波が重視する近世や近代の沖縄（とくに民俗以外）について、それほど注目していない点に、比嘉はもの足りなさを感じていた。<sup>(56)</sup>

#### 4 沖縄民俗と日本

柳田は大正期から昭和初期にかけて、沖縄に関する雑誌や書籍の刊行に力を入れた。『郷土研究』誌や『民族』誌を編集し、炉辺叢書を企画した。一方、南島談話会は1932（昭和7）年末まで約20名の沖縄県人が参加していたものの、1933（昭和8）年5月を最後に開催されなくなった。すでに1932（昭和7）年に改造社を退社していた比嘉は、1933（昭和8）年に柳田との連名で、雑誌『島』を発刊し始めた。<sup>(57)</sup>この雑誌は、それまでの『南島談話』誌では沖縄や先島をはじめとする南西諸島を対象にするだけであったのに対して、それ以外に隠岐や瀬戸内海の島々、伊豆諸島や陸前の諸島など、日本全国の島々を対象としたものであった。この雑誌『島』において、柳田は「漁村語彙」などの論考を、比嘉は「翁長旧事談」などの論考を発表した。しかしこの雑誌は出版元の一誠堂が経営難に陥り、1934（昭和9）年には雑誌を発行する金銭的余裕を無くした。この時すでに原稿は集まっていたので、最後にその

原稿を書籍の形で刊行して廃刊となった。

比嘉が雑誌『島』で発表した論考「翁長旧事談」は、比嘉が17歳まで過ごした西原村翁長についての報告であった。<sup>(58)</sup>この報告は雑誌『島』に3回にわたって連載された。明治20年代の沖縄の農村生活について書かれているが、項目別に並べた型通りの報告ではなかった。儀礼の内容や祭祀組織の構成などの必要項目は満たしている一方で、村人の「生き生きとした」表情や生活のあり方を伝えるものとなっている。<sup>(59)</sup>これは自分の経験によって得られた生活形態を表現しているからであった。比嘉にとって事実を報告するというのは、無味乾燥な調査項目を記述するのではなく、生身の人間の姿を克明に伝えるということの意味した。しかし、この点に比嘉の思いとは裏腹に、柳田民俗学の情報提供者としての限界があった。なぜなら、たとえば行事の分布や意味の解明などを行なうときに、生身の人間の姿を克明に伝えても、民俗学的な分析はできないからであった。とくに比嘉の方法は、柳田が使った各地域の民俗を比較して分析する方法とはなじまないものであった。<sup>(60)</sup>

南島談話会が終了し、雑誌『島』の存続も危ぶまれる一方、柳田は1933（昭和8）年9月中旬から12回にわたって、成城の自宅で毎週木曜日に「民間伝承論」の講義を始めた。この講義には当初から大藤時彦（1902-1990、以下は大藤）、大間知篤三（1900-1970）、後藤興善（以下は後藤）、杉浦健一、そして比嘉らが参加した。参加者は徐々に増え、この講義は柳田を中心とする研究会である「木曜会」へとつながっていった。木曜会は柳田を囲んで和歌森太郎（1915-1977）、関敬吾（1899-1990）、最上孝敬（1899-1983）、大藤らに比嘉を加えた6～7人のメンバーで開催された。木曜会は島々の民俗ではなく、さらに広く全国の農山漁村を対象にした民俗研究が行なわれた。柳田の講義を後藤が筆録して、翌1934（昭和9）年8月に『民間伝承論』（共立社書店）として刊行された。そして1935（昭和10）年7月から8月にかけて、柳田の還暦を記念して開催された日本民俗学講習会を機に「民間伝承の会」が結成され、同年9月に機関誌『民間伝承』が創刊された。この時に、戦後の1947（昭

和 22) 年に民俗学研究所として再出発するとはいえ、現在に至る日本民俗学会の基礎というべきものがつくられた<sup>(61)</sup>。

終戦となって、柳田は国家存続の危機意識から、改めて「歴史」をより強く意識するようになる<sup>(62)</sup>。柳田は敗戦の原因について、次のように語る。

我々の國史学は、全體に中世以後、殊に近世の觀察におろそかであつたことが、斯ういふ方面を見てゆくと、露骨なほど明らかになつて来る。歴史を公民の闕くべからざる修養とする爲には、先づ不完全極まる説明を以て、すぐに満足してしまふ様な、今までの教育方式を撤却し、どんな小さな現在の疑問でも、出せば答へられるだけの用意をととのへるのみで無く、同時に之に由つて身近なる未知世界を開拓して、新たな智慧を収獲しようとしなければならぬ。さういふ機縁は特に信仰生活の方面に多く、しかも問題は道義や經濟、その他あらゆる變遷とからみ合つて居るといふことが、僅かな注意の向け方によつて、いとも手輕にわかつて来る。人が近世史の無知を恥としなかつた氣風、是が或は敗戦の主因だつたかも知れない<sup>(63)</sup>。

柳田は原因を安易に近くに求めるのではなく、その奥にある歴史的に根が深いものをみつめるべきであるという。柳田の考えでは、近世史に関する無意識あるいは記憶障りこそ、敗戦にいたる近代日本の疾病の原因であった。しかし、近世史の解明は歴史家のそれではなく、民俗学を具体的な年代史と結びつけるような形態でやらなければならないという。つまり近世史は、いわば民俗学を年代史の相においてみたものに他ならないと説いている<sup>(64)</sup>。

しかし、近世史を知るということは、単に歴史学的な知識をもつということではなく、それを「思い出す」ことであつた。民俗学とはその方法の謂である。柳田は現在の問題を、隠された歴史、すなわち「常民」の歴史においてみようとした。柳田にとって、原因は歴史の深層にあると同時に、手近なところにもあつた。その手がかりは柳田によれば、信仰生活であつた。この信仰生活について、柳田はすでに戦時中から問題意識をもっていた。むしろ

生死が身近な問題となった戦時中であつたからこそ抱いた問題であつた。柳田は戦時中に『先祖の話』の原稿を執筆し、終戦直後の1945（昭和20）年10月に出版する。そのなかで、敗戦を予期していた柳田が継承すべきこととして、次のように語っている。

もとは他國へ出て行つて働くにも、やがては成功して故郷に還り、再び親類や故舊の間に住まうといふ者が多かつたやうだが、最近になつて人の心持はよほど改まり、何でもその行く先の土地に根を生やして、新たに一つの家を創立しようといふ念願から、困苦と闘つて居る人たちが日に加はつて居る。乃ち家の永續は大きな問題とならざるを得ない。風土環境の我々に及ぼす力は軽く見ることが出来ぬであらうが、住めば忽ち其天然の中にまぎれ込んでしまつて、やがて見分けも付かなくなることは、少なくとも開發者の本意では無いのである。淋しい僅かな人の集合であれば有るだけに、時の古今に互つた縦の團結といふことが考へられなければならぬ。未來に對してはそれが計畫であり遺志であり、又希望であり愛情である。悉く遠い昔の世の人のした通りを、倣ふといふことは出来ない話だが、彼等はどうして居たかといふまでは、参考として知つて置くのが強味である。（中略）さうして其大切な基礎が信仰であつたといふことを、私などは考へて居るのである。固より信仰は理を以て説き伏せることの出来るもので無く、人が背いて行くのを引留めることは困難であらうが、多數の我同胞は感覺に於て之を是認しつつも、實は之を考へ又言葉にする機會だけをもたなかつたのである。はつきりと言つてしまつたら、却つて反對は強くなり、消滅の危険を多くすることになるのかも知れないが、なほ私はこの事實を正確にした上で、それを再出發の起點としなければならぬと思つて居る。<sup>(65)</sup>

1945（昭和20）年の敗戦は必至とみていた時期に起稿されたことから考へて、柳田のいう「家の永續」という問題は、ほかならぬ日本人の永續という問題をはらんでいた、あるいは「家の永續」に関する危機感が、日本人の永續と

いうことに関する危機感に裏打ちされていた。<sup>(66)</sup>

そして柳田は「私は一日も早く平和な日がやって来て、琉球の調査と研究に出かけるのを唯一のたのしみをしている」と語り、柳田の関心は沖縄および南島へと傾いていった。そこで柳田が沖縄研究のために着手したのは、『沖縄文化叢説』（1947年）の刊行であった。柳田はその序で、

せめては諸家の研究が如何なる方向に進み、如何なる段階に於て今は停滞して居るかといふことを世上に紹介してかつは一般の関心を高め、かつは又後代の同志の為に、離島の文化の必ずしも孤独でないことを、夙に我々も亦立証せんとしたことを談りたいのである。

と語っている。その後、柳田は約2万冊にのぼる蔵書をもって財団法人民俗学研究所を設立し、1953（昭和28）年にこの民俗学研究所によって南島総合調査が実施された。これは戦前に中断された南島研究の復活を意味した。民俗学研究所が南島総合調査に着手した際に、柳田は台湾東海岸の民族の習俗と沖縄民俗との比較研究の重要性を指摘した。<sup>(67)</sup>これは大陸から渡来した人びとの橋頭堡が沖縄であろうと考えたからであった。民俗学研究所はわずか10年で解散したものの、その蔵書が成城大学に寄贈された。蔵書すべてを遺贈する条件として、「同大学においてはこの図書を活用して沖縄の研究に万全を期すること」という一項が遺書によって遺された。<sup>(68)</sup>柳田は回顧して、

沖縄の旅の折、島にはお爺さんなどで、字を書くより他にすることのないという人が大勢いたので、私はその人たちに頼んで、貴重な文書をたくさん筆写して貰って持ち帰った。この中には今では唯一の琉球文献となったものが少なくない。<sup>(69)</sup>

と語っているが、日本に1冊しかない『宮古島史料』もそのなかに含まれていた。

柳田は著書『先祖の話』以降において、終戦後の復興を祖先崇拜の伝統に求めた。そしてその基盤を相対的に被害が少なかった農村あるいは農業に求めた。その上で伝統としての祖先崇拜が改めて強調された。しかしこの点に

関して、沖縄文化はあまり触れられていない。『炭焼日記』によれば、比嘉をはじめ沖縄出身者が柳田を訪れ、沖縄戦の様子を報告している。しかしながら、『先祖の話』では沖縄にほとんど触れていない。わずかに1947（昭和22）年の「霊山信仰の統一」（『山宮考』）と「鎮守神の起り」（『氏神と氏子』）において、沖縄神道と本土のそれとの共通性について記しているのみである。柳田は終戦後も沖縄を日本の一部と考えようとしていたが、そのことを積極的に主張することは控えたようである。<sup>(70)</sup>

戦後当初の柳田は、沖縄が占領統治下にあったので、意図的に本土の農村を研究対象として選択している。しかし、一旦、棄損されたとでもいうべき沖縄を回復させるために『海上の道』で再び沖縄を主題化した。『海上の道』は海上交通をめぐる問題について執筆されたが、柳田が大学生時代の1897（明治30）年に伊良湖崎で椰子の実を見て以来、関心をもった問題であった。1950（昭和25）年から1952（昭和27）年頃にかけて講演や雑誌上で発表した論考を、1961（昭和36）年にまとめて論文集『海上の道』（筑摩書房）として刊行した（柳田は1962年に亡くなるので、逝去の前年であった）。『海上の道』は主に日本人の渡来の問題と他界観の問題について論じられ、9編の論考から成り立っている。すなわち、渡来については4編（「海上の道」「寶貝のこと」「人とズズダマ」「稲の産屋」）、他界観については4編（「海神宮考」「みろくの船」「根の国の話」「鼠の浄土」）、そして他の1編が「知りたいと思う事二三」である。

柳田は「日本人は最初どの方面から、どこへ来たか。つぎつぎに、どの方面に移りひろがったか」という渡来の問題をめぐる、宮古近海の寶貝を求めて稲作民が大陸から渡来し、南島を原郷として、さらに島伝いに北方へ移住するようになり、これが日本民族の起源であろうと語る。この北進説は、前述のように戦前から柳田がもち続けていた問題意識であったが、戦後になって、

我々の国土はやや荒れたりといえども、幸いにして今も血を承けた者が

住んでいる。すなわち再び国の成立について、まともに考えてみるべき時期ではないかと思う。<sup>(71)</sup>

と記して、血を受け継いだ民族は継続しているので、戦後という環境の中で起源を再考してもよいのではないかと語りかける。問題意識は『海南小記』と変わっていないものの、「国の成立」をかなり意識したものとなっている。柳田は、

ふたたび南島研究の気運の萌しを見る悦びのあまりに、一つの新しい問題を提出しようとする気になった。それは耳から口へ、口からまた耳へという経路を通して、久しく保存せられてきた昔話や伝説の類を整理して、島と島との古くからの関係を考えてみようとする学問は民族学の領分であるか。ただしはまた一国民俗学等の別な名称をもって、その圏外に置くべきものであるか。(中略) 是からの判断を明かにしてもらうために、まず少しばかり実地の例を並べて置くことにする。<sup>(72)</sup>

と語る。『海上の道』では「一国民俗学」という言葉が散見される。まさに国家を意識した民俗学を確立しなければならないということである。この民俗学には、悲惨な過去をより良い社会を形成するための力にすべきであるという倫理観が底流にある。これによって、柳田の一国民俗学はすでに1930年代に確立されていたものの、戦後のナショナリズムの流れに受け入れられやすい素地をもったといえる。<sup>(73)</sup>

戦後の柳田は、『海上の道』にみられるようにナショナル・アイデンティティを強調し、「単一民族の邦を成す」ということもあったが、その一方で、日本民族の混濁性も認めている。<sup>(74)</sup>したがって、一国民俗学を唱えるようになった柳田が、必ずしも日本を単一民族国家とみなしていたというわけではない。近代日本国家が誕生した時にアイヌが存在していたことも、植民地の台湾や朝鮮のりびとが「日本人」であったことも、もちろん柳田は認識していた。結局、柳田のいう単一民族主義とは、おそらく「一国主義」のことであるとみられる。<sup>(75)</sup>

さらに柳田は民族学に触れ、民族学が単に保存の尊重というよりも、それまでの経緯や過程を考えなければならないとして、それが許される文化段階は広い太平洋の上でも、それほど多くないと説く。柳田と民族学との関わりは複雑である。すなわち、ある時には民俗学と民族学との境界を取り払おうとするところまで接近するかと思えば、ある時は民族学の方法と見方に厳しい姿勢で臨み、強い拒否を示すこともあった<sup>(76)</sup>。そして柳田は日本民族の渡来という、民族学や考古学の方法を取り入れなければならないような問題に対して、沖縄の内から迫ろうとした。ここに柳田の民俗学が『海上の道』で未完のままに終わったひとつの原因がある。

しかし、日本民族の渡来という疑問を投げかけられた民俗学は、その解明に努めなければならなかった。柳田によれば、その手がかりとなる『仲里旧記』では、海のかなたとの通信往来が頻繁に行なわれたようであるが、それをさらに具体的に明らかにする必要があった。しかし柳田は、

今日の社会状況は、はたしてそういう希望を可能にするかどうか。新たに進出せんとする我々の一国民俗学にとっても、是は寔に容易ならぬ試練であった<sup>(78)</sup>。

と危惧する。そこで柳田が手がかりにするのは、「寶貝」と「信仰」であった。

「寶貝のこと」では、「金銀の未だ冶鑄せられず、山が照り輝く石を未だ掘り出さしめなかった期間、自然に掌上に取上げられるものとしては、寶貝目ざましく、あでやかなる物は他に無かった」として「莫大なる輸出をして居たのが、この洋上の小王国であった」と語る。南方シナからこの寶貝を求めて黒潮の道を島伝いに渡ってきた人たちが、稲を携え、米づくりの技術をもたらした。それが日本人の祖先だろうというのが『海上の道』の構想であった。しかし寶貝について『海南小記』では、

寶貝はこのあたりの海に、珠や綿よりもなお美しい、さまざまの種類を産する。それを貨幣の用にたてることは、沖縄では知らなかった。またどこからも求めにはこなかったらしい<sup>(79)</sup>。



と記されていた。40年近く経ってから、この宝貝に関して自ら訂正して、重要な役割を果たしていると強調する<sup>(80)</sup>。柳田は中国の殷王朝の遺跡から大量の宝貝が出土したこと、さらに沖縄首里で目にした宝貝のコレクションを想起している。このコレクションは最後の琉球王の四男で男爵となった尚順が収集したものであった。柳田は、殷代の大陸への宝貝の供給地を東方の海に求め、中国大陸と沖縄とを結びつける。柳田が想定したのは、

いわゆる東夷の活躍が次第に影響を中原の文化に及ぼし、宝貝の重視熱望がほぼ頂点に達せんとした時代が、ちょうど極東列島のいずれかの一つに、始祖日本人の小さな群が足を印した頃らしいときまると、それから後の約二千年、すなわち安全なる年代記に繋がるまでの大きな空間は、まずそっくりとこの九学会の領分に入ってきて、外ではただ研究の成長を期待することになるであろう。みなさんの責任は無上に重くはなるが、この想像はかなり爽快ものだと思う<sup>(81)</sup>。

ということであった。柳田がこれを語ったのは、1952（昭和27）年5月の第六回九学会連合大会において、「海上生活の話」と題して公開講演をした時であり、この解明を隣接科学の研究者に呼びかけ、将来は九学会で総合的に研究することを望んでいる。ちなみに、『海上の道』の出版をきっかけにして、日本と南島との関わりについて、人類学、民俗学、考古学、言語学その他の分野において、討究されるようになった。

柳田は宝貝の魅力に魅かれて南島の一角に本格的に移住するに至ったと想定し、その地点として宮古島を考える。柳田は、

秦の始皇の世に、銅を通貨に铸ようになったまでは、中国の至宝は宝貝であり、その中でも二種のシブレア・モネタと称する黄に光る子安貝は、一切の利欲願望の中心であった。今でもこの貝の産地は限られているが、極東の方面に至っては、我々の同胞種族が居住する群島周辺の珊瑚礁上より外には、近いあたりには、これを産する処は知られていない。（中略）  
いわゆる琉球三十六島の中でも、宮古は異常に歴史の進化の歩みが激し

く、しかも天災地変の圧迫が強烈であって、人は悩み且つしばしば入替り、したがって言語文物の錯雑が著しいことは、夙<sup>はや</sup>く私も気がついて、『島の人生』の中にも一端を説いてみたことがあったが、この島の周辺に広い地域にわたった干瀬があって、そこが貝類の最も豊富なる産地であり、今も近隣の島々に供給していることは、今度大森君の紀行によって始めて学び知った。<sup>(82)</sup>

と語り、宮古島に注目する。ここでいう大森君の紀行とは、大森義憲（1907-1982）の著述『諸國叢書』（成城大学民俗学研究所）のことである。

次に、柳田が取り上げるのは、稲作の灌漑様式の発展と、それに伴う「信仰」の問題であった。灌漑様式については四段階に分け、それらが現在も併存しているという。四つは（一）天水によるもの、（二）清水掛り、（三）池掛り、（四）堰掛り、である。すでに（二）と（三）の灌漑方式が可能であると知りながら、わざわざ（一）の方式しかない小島へ渡って農業を行なうことはありえない。したがって、原始日本人の南から北への移動が推定されることになるという。そして、日本人の他界観を扱った「海神宮考」や「根の国の話」では、日本人の神と信仰について考察しているが、これは『先祖の話』以来、追究してきた問題であった。ここにおけるニライカナイの所在をめぐる他界観の問題の解決は、日本人渡来の仮説に大きな影響を与えている。「海神宮考」や「根の国の話」は、明らかに北進説を想定して書かれている。これらの論考では記紀にあらわれる根の国、常世の国といった他界と、沖縄人の信じていた他界であるニルヤ、ニライカナイとの関係が論じられる。とくに、根の国は、根という言葉から地底の国と解されてきたが、柳田はニライカナイとの関連から、根の国も常世の国も、元来、向こうから神をはじめとして来訪するものがあり、こちらからも稀に来訪できる海の彼方の楽土であったのではないかと推測する。もしそうであるとすれば、「それこそは我々の先祖の大昔の海の旅を、跡づけ得られる大切な道<sup>(83)</sup>しるべ」であると考え。したがって、他界は「海上の故郷であるが故に、単に現世において健闘した人々のために、

安らかな休息の地を約束するばかりでなく、なおくさぐさの厚意と声援とを送り届けようとする精霊が止住し往来する拠点<sup>(84)</sup>でなければならないとする。

この他界感<sup>しじゅう</sup>は折口にもみられる。柳田の南島研究が『海上の道』として結晶したように、折口は「民族史観における他界観念」を最後の論文として残している。柳田と折口に共通している点は、学問上の遺書ともいえるようなかたちで、われわれの先祖が海のかなたにあると信じた他界(根の国とよばれ、常世といわれ、文学的には妣の国とも表現された魂のふるさと)について書き残したことであった。柳田は1954(昭和29)年の折口の追悼講演において、「ネノクニといふのは、(地下の国ではなく)、もとづくところ、自分等の出来たところ、故郷といふ意味であるといふことがはつきり解りまして、我々の学問は非常にほがらかになり、日本の信仰にも明るみが増えて参つたのであります」(わがとこよびと)と語っている。柳田は終戦後の精神的支柱を失って、喪心状態にある同胞に、「明るい」他界を示したかったようである。それと同時に、柳田に師事した政治学の神島二郎(1918-1998)によれば、当時の占領軍の中に、沖縄人は日本人と異民族であるから、沖縄を片面講和で分離したことは、文化的にいっても正しいのだという議論があったことに対して、柳田は反撃したかったために『海上の道』を書いた<sup>(85)</sup>という。日琉同祖論とともに、この他界観もこのような背景をもっていた。

柳田は九学会連合大会の講演において、最後に次のように結んでいる。

四面を海で囲まれた国の人としては、今はまたあまりにも海の路を無視し過ぎる。やや奇矯に失した私の民族起原論が、ほとんど完膚なく撃破せられるような日が来るならば、それこそは我々の学問の新しい展開である。むしろそういう日の一日も早く、到来せんことを私は待ち焦<sup>(86)</sup>れている。

そこで古代沖縄人がどこからやって来たのかという問題が議論された。柳田はその渡来について、当時の学説に対して異論を唱えた。沖縄では東西南北をアガリ、イリ、ハエ、ニシという。言語学の金沢庄三郎(1872-1967)は、

北をニシというのは「いにし」、つまり「去にし」の意で、古代沖縄人が北からやって来たことを示しているという説を唱え、それが定説となっていた。しかし、柳田は「いにし」というのは「行った」という意味であり、こちらから向こうへ行ったということであると説明する。むしろ古代沖縄人は一部が北の方へ行ったということであり、もし「きた」というのであれば、「こし」というべきであると語る。さらに、中国では漢民族のきたところを「越」といい、日本でも「越の国」というのは氏族が渡って来たところに名付けていることもあると説明する。ここでも柳田は北進説を主張し、古代沖縄人は南方から来たという説を唱える。

また、沖縄人の祖先の渡来に関する想定で、柳田と伊波で大きな違いがあった。柳田は『海上の道』において、日本人の起源は舟で南から来たという点は「私といえどもまだ想像説にとどまっているにすぎない<sup>(87)</sup>」として、北から来たものと考えなくては説明のつかない事実もあり、二つの系統があったとされていた。これに対し伊波は、稲作技術は南から伝来したとしても、人は本土の方から南進してきたという説を立てていた。比嘉は軽々しく断定できないとしているものの、どちらかという伊波の説が実際的ではないかと考えていた。柳田は、伊波の日本民族南進説に対して、苛立ちを感じていた気配がある。しかし、この対立は表面化したものとはならなかった。二人の間に論争がなかったのは、伊波の側に柳田に対する敬意があったためである。もっとも、伊波の著書『日本文化の南漸』のなかには、あきらかに柳田の説を批判した箇所があり、一方で、『海上の道』は伊波の説を意識して書かれた部分もある。

これまで北進説と南進説に関して様々な学説が出されているものの、現在に至るまで確定的なものはない。柳田と伊波との関係も、単に主張に食い違いがあったという程度で、深刻な対立関係には至っていない。むしろ比嘉によれば、柳田による伊波の批評は、比嘉によって伊波に伝えられ、伊波の研究傾向を左右したようである。たとえば、柳田が「伊波君は、沖縄の地方の

方言の研究をもう少しやらなくてはだめだね」と批評したことを、比嘉は伊波に伝えている。その後の伊波の研究は、地方の古語にも研究の手を広げているので、柳田の忠告を率直に受け入れたことがわかる。柳田のほうも伊波の研究業績について、「これより後、だれがおもろを研究するにしても伊波君のうち立てた基礎によるほかはなかりう」と高く評価している<sup>(88)</sup>。

柳田は沖縄文化研究については、いうまでもなく、伊波に多くを負っていた。これは、たとえば、『海上の道』の寶貝、ニライカナイ、ニライカナイの死者の鼠をみれば明らかである。しかし柳田は、伊波の綿密な論証の上に立つ主張に対して、自らの論を変えることはなかった。たとえば、ニライカナイの所在については、二人は明らかに対立している。伊波によれば、ニライカナイははじめ北方にあると信じられていたが、第一尚氏が東部の佐敷から勃興するとともに東に移った。これを日本民族（海部族）南下の主たる論拠にしている。これに対して柳田は、

故伊波普猷氏の『あまみや考』は努力の著述だが、アマミは海人部なるべしという栗田翁の説を受けて、この種族の北からの移住をほぼ承認しておられる。その結果として、最初のニルヤは北にあり、中世の終りに近くなって東の方へ変ったという、意外な結論が導かれたけれども、私などはどうもその証拠を見出すことができない。ニルヤが東方にあることを明示した言葉が、古い文献には見当らぬのは事実だろうが、それはただ新しい名の入用が前はなかったというまでで、ニルヤはそう簡単に北から東へ、方角を更え得られるような信仰ではなかったかと思う<sup>(89)</sup>。

として、伊波の説をまったく否定している。

もっとも、沖縄人の祖先については、伊波の主張のように、本土から南進した可能性が十分ありえると同時に、柳田の説のように、南から北進した可能性も排することはできない。つまり、二人の説がともに成り立つ余地がある。この点を伊波は「南島に打寄せた人種移動の波はただ一度ではなかつたやうな気がする<sup>(90)</sup>」と認める。しかし、ここで留意しておかなければならないのは、

伊波の思考が本島中心になりがちなのに対して、柳田のほうは、八重山諸島や宮古諸島を、そして本島とその周辺の島々を視野に入れているという点である。さらに柳田は騎馬民族説も含め、日本民族の南進説のすべてに対して否定的であったが、その批判は、反証をあげて論破するという形をとっていない。あえて言えば、黙殺といえるかもしれない。これは実証を旨とする柳田の学風にそぐわない姿勢である。

柳田が『海上の道』でみせたこの姿勢は、前述のように伊良湖岬での「椰子の実」の体験に由来していると考えられる<sup>(91)</sup>。柳田は椰子の実の体験によって、日本が黒潮を介して南方と深く結びついているという事実をまのあたりにしたからである。もっとも、この時の南方とは南洋諸島のことであって、沖縄ではなかった。しかし、この漠然とした南方への想いが、やがて沖縄という具体的な対象を得ることになった<sup>(92)</sup>ということである。確かに柳田にとって椰子の実の体験は底流となっていたことは、その後の民俗学の展開がよく物語っている。それとともに、柳田にとって北進説を唱える理由は、南進説であれば「故郷」としての南方を奪われることになるからであった。もし沖縄の島々に暮らす人びとが、日本民族が南方から本土へと北上する際の「落ちこぼれ」であるならば、沖縄人を含む日本人は、ともに南方を故郷とすることができる。そして『海上の道』で言及される宝貝など、日本では失われてしまったものを、沖縄の人びとが伝えていると考えることができる。これらのことから柳田は北進説に固執し、日本文化の深層にひそむ南方的要素をとらえようとしたのである。

## 5 結びにかえて

大江健三郎（1935-、以下は大江）は柳田の沖縄をみつめる視点について、戦後の沖縄における異民族支配下に育った、そして日本本土への「異族」の意識も強い研究者が、伊波ら沖縄学の先達の、日本・中心文化にまきこまれた側面を批判し、周辺文化としての琉球・沖縄の独自性を押し出す。

それはそれとして鋭い成果を生んだが、僕にはいま柳田の「私」のひそめている多様性が、かならずしもかれらの視点と排除しあわぬところをそなえているようにも思う<sup>(93)</sup>。

と語っている。大江によれば、柳田がもっていた多様性は、沖縄学の研究者の視点を排除するものではなかった。なるほど伊波や比嘉らとは意見の違いもみられたものの、決定的な対立ではなかった。もっとも、それは柳田の多様性というよりも、「日本」と「沖縄」は同じ民族であるという日琉同祖論が基底にあったためである<sup>(94)</sup>。

しかしながら、柳田が日琉同祖論を心から信じていたかどうかは不明である。沖縄が米軍統治下にあり、そのことによって「日本」から切断されている時、その返還への国民的要望を表現するかたちで、『海上の道』をはじめ柳田の沖縄論が書かれた<sup>(95)</sup>。しかし、柳田が本当に「日本」だと信じていたかどうかは疑わしい。確かに、柳田の沖縄論は中国と琉球との交通関係の重要性を棄却し、日本との関係のみを位置づけようとしている。しかしながらその一方で、戦前の『海南小記』の旅において、柳田は沖縄本島だけでなく、むしろ離島を巡り、そこに「離島苦」という差別を見出した。奄美や琉球諸島における抗争の歴史についても触れた。このことから「沖縄」というものは存在しないという認識の手前まで近づいていた。日琉同祖論に基づく伊波の沖縄語保存運動にも触れて、その保存が困難であるとし、「沖縄語にはまだ統一の事業が完成していなかった。統一の基準となるべき首里那覇の語には活力はあるが、それがあり過ぎてかえって盛んに変化している。これでは保存の方で追いつくことができぬと思う<sup>(96)</sup>」からであるとした。沖縄の同一性が疑わしいとすれば、それが「日本」といえるのかどうかという疑問が生まれる。そして『海上の道』では、天皇と稲作に象徴される「日本」というものが揺らいでいた。それにもかかわらず、柳田にとって「沖縄」は存在し、「日本」も存在しなければならなかった。とくに終戦後においては、沖縄は日本でなければならなかった<sup>(97)</sup>。これは文化論の範ちゅうを超えてしまって、政治的な

主張となっ­てしま­い、柳田の沖繩論が誤解を招く大きな原因ともな­った。

また、柳田の北進説にも一種のためらいがあ­った。日本人の祖先が南から沖繩の島々を­経て北上したという考えは、1920（大正9）年末から1921（大正10）年初めにかけての沖繩旅行の前後に懐抱するところとな­った。しかし、柳田の口調には若干のためらいがみられる。それは当時、日本人の渡来に­関して、世上に流布していた説の多くが、柳田の説と相反するものであ­ったからである。伊波でさえ、沖繩への日本民族の南進説を唱えた。も­っとも、伊波との対立でさえ、柳田には動揺した気配はな­かった。柳田は北進説を信じ続け、しかも年をおうごとに、確信が強くな­っていったようにさえ見える。寶貝に対する関心が、それを裏付けている。すなわち、寶貝に対する関心は1921（大正10）年から翌年にかけての沖繩旅行以降であ­ったが、『海南小記』では日本人渡来のきっ­かけとして考えられてい­な­ったのである。

日本人の渡来に関する柳田の仮説には、三つのメルクマールがあ­った。すなわち、寶貝、稲、南島である。<sup>(98)</sup>柳田は長年の研究成果をふまえて、仮説に到達した。そして、あくまでも事実をめ­ぞして、客観的な妥当性をもつか否かが評価の基準であ­ったことは当然である。実際に1952（昭和27）年5月の第六回九学会連合大会の公開講演の際に発表したこの仮説に対し、それ以後、1962（昭和37）年の死去の直前まで、柳田は強い執着を示し、その成立を願­って補強するための資料を蒐集した。しかし、とくに『海上の道』で目立つのは、柳田が仮説を述べる時は、ほとんど断定的とい­ってよい口調になり、その口調に見合うだけの証拠をほとんどあ­げていないことである。

柳田は仮説を立てるにしても、なんらかの結論を導き出すにしても、その前に多くの例証を積み重ねるのを常としてきた。ときには事実だけを述べて、結論は読者に委ねることもあ­った。この点で、きわめて慎重であ­ったので、一旦、柳田が引き出した結論には説得力があ­った。『海南小記』はこのよ­うな論旨の立て方によって、民俗学研究に本格的に取り組むきっ­かけをもた­らした。しかし『海上の道』はこのよ­うな論旨の立て方とは逆であ­った。まず結



論があり、しかもそれは証拠や裏付けのない、あたかも自明の事実であるかのように語られた。さらに柳田自身は「海上の道」研究を民俗学の成果として位置づけなかった。<sup>(99)</sup>柳田が断定的な仮説を述べるという論旨の立て方をしたのは、九学会連合大会で発表されたことが物語っているように、明らかに学会員の研究活動の起動力となることをねらったものである。そのためには慎重な手順を経た上での控え目な表現よりも、断定的な表現のほうが耳目を集める。「海上の道」の仮説が、発表後のさまざまな論議の対象となり、それによって南島研究が飛躍的に発展したことを考えるならば、柳田の方法は多大な効果をもたらしたといえる。<sup>(100)</sup>

周知のように、柳田は民俗学ばかりでなく、新体詩や農政学という分野においても活躍した。しかし、これらの分野がそれぞれ切り離されていたわけではない。諸分野には柳田が一貫して取り組んだ点がある。それは日本人(柳田自身も含む)の「生活の理法」あるいは「生きざま」を問うという視点から取り組まれたという点である。もしそうであるとすれば、『海上の道』がそれまでの柳田の方法を逸脱し、新たな分野を見出そうとしたものであったといっても不思議ではない。むしろ逸脱することによって、民俗学にかわる新たな分野、たとえば「新たな国学」のきっかけとなることを願っていたのかもしれない。

## 注

- (1) 谷川健一「『海上の道』と天才の死」(『論争』、第4巻9号、1962年、166～71ページ)。
- (2) 笹森と『南島探験』については、拙稿「笹森儀助と地域振興—『南島探験』をめぐって」(『京都産業大学論集人文科学系列』、第38号、2008年、116～46ページ)。比嘉財定は沖縄出身で、旧制第五高等学校から東京大学に進学し、熊本営林署長を勤めた後、アメリカ留学もするが早世する。柳田以外に言語学者ニコライ・ネフスキー(Nikolai Aleksandrovich Nevsky, 1892-1937)とも交流があった。
- (3) 柳田国男『故郷七十年』講談社学術文庫、2016年、249ページ。
- (4) 酒井卯作「戦後の民俗学研究所における南島研究会議事録」(『南島研究』、第45

- 号、2004年)。
- (5) 拙稿「伊波普猷と「沖縄学」の形成—個性と同化をめぐる—」(『京都産業大学論集人文科学系列』、第42号、2010年、1～34ページ)。
  - (6) 柳田国男、前掲書、2016年、322ページ。
  - (7) 柳田国男『海南小記』角川文庫、2013年、7ページ。
  - (8) 新渡戸と柳田の関係については、1908(明治41)年に発足した「郷土研究会」を発展させて、1910(明治43)年に新渡戸が世話人、柳田が幹事役で「郷土会」を発足させた。1919(大正8)年に柳田が貴族院書記官長を辞任し、新渡戸が国際連盟事務次長として渡欧したために、郷土会は活動を休止した。詳しくは、佐谷眞木人『民俗学・台湾・国際連盟—柳田国男と新渡戸稲造』講談社選書メチエ、2015年。
  - (9) 「ジュネーブの思ひ出」(『定本柳田国男集』第31巻、筑摩書房、285ページ)。チェンバレンは、当時、注目を浴びていた日本に関する新渡戸の説明が、学術的な根拠を欠くものとして、日本の事物に関する話題になると不快を覚えたようである。平川祐弘『破られた友情—ハーンとチェンバレンの日本理解』新潮社、1987年、89～101ページ。
  - (10) 柳田国男「付記」(『海南小記』角川文庫、2013年、255ページ)。
  - (11) 同上書、10～1ページ。
  - (12) 同上書、256ページ。
  - (13) 伊波普猷「琉球古今記序文」(『伊波普猷全集』第7巻、平凡社、1975年、68ページ)。
  - (14) 柳田の南島旅行の状況については、柳田国男著・酒井卯作編『南島旅行見聞記』森話社、2009年；酒井卯作『柳田国男と琉球—『海南小記』をよむ』森話社、2010年。
  - (15) 柳田国男、前掲書、2016年、399～400ページ。
  - (16) 柳田は「民俗学」よりも「郷土研究」という用語を使っているが、その歴史的な由来をたどる研究が多いという特徴がある。拙著『近代日本の農業政策論—地域の自立を唱えた先人たち』昭和堂、2012年、98～102ページ。また柳田にとって、民俗学は歴史の方法として普遍化されえたものであり、民俗学は方法であって、その対象によって定義されないものである。柄谷行人『柳田国男論』インスクリプト、2013年、21～34ページ。
  - (17) 柳田国男『海南小記』角川文庫、2013年、138～9ページ。
  - (18) 同上書、233ページ。
  - (19) 同上書、241～2ページ。
  - (20) 柳田国男「海上文化」(柳田国男『定本柳田国男集』第1巻、筑摩書房、1968年、523ページ)。

- (21) 柳田国男、前掲書、2016年、265ページ。
- (22) 「年譜」(柳田国男『定本柳田国男集』別巻第5、筑摩書房、1971年、634ページ)。
- (23) 折口信夫「沖縄探訪手帖」(折口博士記念古代研究所編『折口信夫全集』第16巻、中央公論社、1967年、144～99ページ);植村和秀『折口信夫—日本の保守主義者』中公新書、2017年、196～203ページ。
- (24) 伊波普猷「琉球古今記序文」(『伊波普猷全集』第7巻、平凡社、1975年、67ページ)。
- (25) 柳田による民俗学自体に対する関心については、拙稿「柳田国男の農政学の形成—産業組合と報徳社をめぐる」(『京都産業大学論集社会科学系列』、第27号、2010年、83～125ページ)。
- (26) 伊波の日琉同祖論は、近代沖縄にとって、新しいアイデンティティを見定める際の有力な根拠となった。高倉倉吉編著『沖縄問題—リアリズムの視点から』中公新書、2017年、16～9ページ。
- (27) 村井紀『新版 南島イデオロギーの発生—柳田国男と植民地主義』(岩波現代文庫、2004年)は、柳田の南島による植民地主義の視点を強調する。
- (28) 柳田国男『海南小記』角川文庫、2013年、10ページ。
- (29) 同上書、254～7ページ。
- (30) 比嘉春潮「年月とともに」(『比嘉春潮全集』第4巻、沖縄タイムス社、1971年、358～9ページ)。沖縄の民俗研究史については、宮良高弘・山下欣一「沖縄の民俗研究史」(瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス [増補版] 日本民俗学の成立と展開』、ベリかん社、1994年、419～63ページ)。
- (31) 拙稿「笹森儀助と地域振興—『南島探験』をめぐる」(『京都産業大学論集人文科学系列』、第38号、2008年、116～46ページ);拙稿「沖縄の地方制度と報徳仕法—『一木書記官取調書』をめぐる」(『報徳学』、第9号、2012年、105～24ページ)。
- (32) 比嘉春潮「年月とともに」(『比嘉春潮全集』第4巻、沖縄タイムス社、1971年、363ページ)。
- (33) 拙稿「金城朝永と琉球学の構想」(『京都産業大学論集人文科学系列』、第48号、2015年、255～80ページ)。
- (34) 比嘉春潮「年月とともに」(『比嘉春潮全集』第4巻、沖縄タイムス社、1971年、365ページ)。
- (35) 柳田国男『定本柳田国男集』第29巻、筑摩書房、1970年、10ページ。
- (36) 柳田国男『青年と学問』岩波文庫、1976年、109～10ページ。
- (37) 同上書、111～2ページ。
- (38) 柳田国男『定本柳田国男全集』第25巻、筑摩書房、1970年、66ページ;比屋根照夫「大正末期の思想的断面—柳田国男と伊波普猷」(『沖縄史料編集所紀要』、

- 第7号、1982年、138～61ページ)。
- (39) 伊波普猷「琉球古今記序文」(『伊波普猷全集』第7巻、平凡社、1975年、68ページ)。
- (40) 鹿野政直『沖縄の淵—伊波普猷とその時代』岩波書店、1993年、215～28ページ。
- (41) 富山一郎『暴力の予感—伊波普猷における危機の問題』岩波書店、2002年、160ページ。
- (42) 伊波普猷「おもろと我が上代国語との関係」(『上代国文』、第2巻1号、1935年)。
- (43) これは各地域では研究をするのではなく、調査をするにすぎないとした柳田の学問的方法の延長上にあった。柳田国男『青年と学問』岩波文庫、1976年、182～205ページ。
- (44) 鹿野政直、前掲書、1993年、226ページ。
- (45) 柳田国男、前掲書、2016年、392～3ページ。
- (46) 柳田国男『定本柳田国男集』第25巻、筑摩書房、1970年、162ページ。
- (47) 伊波普猷『孤島苦の琉球史』(『伊波普猷全集』第2巻、平凡社、1974年、263～4ページ)。
- (48) 安仁屋政昭・仲地哲夫「「そてつ地獄」と昭和恐慌」(沖縄県編『沖縄県史 第3巻 経済』沖縄県、1973年、637～61ページ)。
- (49) 伊波普猷『沖縄歴史物語—日本の縮図』平凡社ライブラリー、1998年、194ページ。
- (50) 伊佐眞一『伊波普猷批判序説』(影書房、2007年、151～3ページ)によれば、伊波は回答と無回答のどちらも示している。回答したのは支配・被支配関係のない社会の出現という理想状態のことであり、無回答とは、現実の状況で、具体的にどの国の政治下にあった方が良いのかという問いに対して沈黙(無回答)していたということである。伊波は、歴史学というのは過ぎ去った事象の研究であるという固定観念にとらわれていたため、沖縄の帰属問題は沖縄史の範囲外であるとみなした。
- (51) 村井紀、前掲書、2004年、265～308ページ。
- (52) 柳田国男「郷土生活の研究法」(『定本柳田国男集』第25巻、1970年、314～28ページ)。
- (53) 比嘉春潮「年月とともに」(『比嘉春潮全集』第4巻、沖縄タイムス社、1971年、345～62ページ)。
- (54) 比嘉春潮「柳田国男と沖縄」(『比嘉春潮全集』第4巻、沖縄タイムス社、1971年、9ページ)。
- (55) 柳田国男、前掲書、2016年、392ページ。
- (56) 由井晶子「比嘉春潮を語る(続) —同伴者の矜持を貫いた気骨」(『新沖縄文学』、第34号、1977年、121ページ)。

- (57) 比嘉春潮「柳田国男と沖縄」（『比嘉春潮全集』第4巻、沖縄タイムス社、1971年、40～2ページ）。
- (58) 比嘉春潮「翁長旧事談」（『比嘉春潮全集』第3巻、沖縄タイムス社、1971年、176～208ページ）。
- (59) 比屋根照夫「沖縄研究における歴史認識—「比嘉春潮全集」にふれて」（『文学』、第40巻4号、1972年、177ページ）；比嘉政夫「比嘉春潮—その研究と方法」（瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス [増補版]』、ベリかん社、1994年、160～3ページ）。
- (60) 拙著、前掲書、2012年、101～2ページ。
- (61) 英米の民俗学の形成は、日本に比べてかなり早い。イギリスでイギリス民俗学会（English Folklore Society）が設立されたのは1878（明治11）年、アメリカでアメリカ民俗学会（American Folklore Society）が誕生したのは、その10年後の1888（明治21）年であった。いずれも国民国家の形成期と重なっている。日本の民俗学は英米の民俗学にくらべて、かなり遅れて誕生したことになる。柳田が『民間伝承論』のなかで記した「一国一言語一民族」とは、国民国家によって創出されたネイションとしての民族のことである。伊藤幹治『柳田国男と梅棹忠夫—自前の学問を求めて』、岩波書店、2011年、153～4ページ。
- (62) 柳田の学問には、「危機」への感情が、その動機としてあった。大塚英志『殺生と戦争の民俗学—柳田国男と千葉徳爾』角川選書、2017年、294～7ページ。
- (63) 柳田国男「氏神と氏子」（『定本柳田国男集』第11巻、筑摩書房、1969年、509ページ）。
- (64) 柄谷行人、前掲書、2013年、132～3ページ。
- (65) 柳田国男「先祖の話」（『定本柳田国男集』第10巻、筑摩書房、1969年、150～1ページ）。
- (66) 柄谷行人、前掲書、2013年、218ページ。
- (67) 国分直一「柳田国男と「海上の道」」（『沖縄文化研究（法政大学）』、第3号、1976年、237～8ページ）。
- (68) 牧田茂「解説」（柳田国男『海南小記』、角川文庫、2013年、273ページ）。
- (69) 柳田国男、前掲書、2016年、258ページ。
- (70) 桂秀実・木藤亮太『アナキスト民俗学—尊皇の官僚・柳田国男』筑摩選書、2017年、315～6ページ。
- (71) 柳田国男『海上の道』岩波文庫、1978年、34ページ。
- (72) 同上書、57ページ。
- (73) 桂秀実・木藤亮太、前掲書、2017年、20～1ページ。柳田は初期の段階で山人、漂泊民、被差別民などを論じていたのみにもかかわらず、それを放棄して常民を対象とする「一国民俗学」に向かったことが批判されるようになった。

- (74) 柳田国男「祭日考」(『定本柳田国男集』第11巻、筑摩書房、1969年、185～248ページ、初出は1947年)；柳田国男・折口信夫・石田英一郎「日本人の神と靈魂の観念そのほか」(『民俗学について—第二柳田国男対談集』筑摩叢書、1965年、5～47ページ)。
- (75) 桂秀実・木藤亮太、前掲書、2017年、167～8ページ。
- (76) 岡谷公二『島／南の精神誌』人文書院、2016年、35～6ページ。外間守善は『海上の道』を「民俗学と民族学の学問的方法の融合を願望した柳田の遺言の書」と評している。外間守善『沖縄学への道』岩波現代文庫、2002年、168～203ページ。
- (77) 柳田国男『海上の道』岩波文庫、1978年、72ページ。
- (78) 同上書、84ページ。
- (79) 柳田国男『海南小記』角川文庫、2013年、94ページ。
- (80) 柳田の宝貝の説明は、仮定が多く、心許ないものであった。上田信『貨幣の条件—タカラガイの文明史』筑摩選書、2016年、16～9ページ。
- (81) 柳田国男『海上の道』岩波文庫、1978年、49ページ。柳田は1952(昭和27)年5月に第六回九学会連合会において、「海上生活の話」と題して公開講演をし、その論文が「海上の道」として雑誌『心』、第5巻10号・11号・12号、1952年10～12月)で発表された。
- (82) 柳田国男『海上の道』岩波文庫、1978年、43～5ページ。
- (83) 柳田国男「海神宮考」(『海上の道』岩波文庫、1978年、107ページ)。
- (84) 柳田国男「根の国の話」(『海上の道』岩波文庫、1978年、153ページ)。
- (85) 神島二郎・伊藤幹治編『シンポジウム柳田国男』日本放送出版協会、1973年。
- (86) 柳田国男「海上の道」(『海上の道』岩波文庫、1978年、56ページ)。
- (87) 柳田国男「故郷七十年(改訂版)」(『定本柳田国男集』別巻第3、1971年、416～8ページ)。
- (88) 比嘉春潮「年月とともに」(『比嘉春潮全集』第4巻、沖縄タイムス社、1971年、371ページ)。
- (89) 柳田国男「海神宮考」(『海上の道』岩波文庫、1978年、97ページ)。
- (90) 伊波普猷「孤島苦の琉球史」(『伊波普猷全集』第2巻、平凡社、1974年、108ページ)。
- (91) 岡谷公二、前掲書、2016年、50～2ページ。
- (92) この点では、国際連盟委任委員として南洋諸島と関わりをもったことも影響を与えた。柄谷行人、前掲書、2013年、250～3ページ。
- (93) 大江健三郎「解説」(柳田国男『海上の道』、岩波文庫、1978年、327ページ)。
- (94) ナショナル・アイデンティティの理想を追求しないナショナリズムは存在しないが、ナショナリズム的な活動の典型が民俗学であったといえる。アントニー・D・スミス著／庄司信『ナショナリズムとは何か』ちくま学芸文庫、2018年、44～9ページ。

- ジ。民俗学は元来、国家とのかかわりの中で成立した側面を強くもった。
- (95) アメリカは沖縄の統治において、日本と沖縄を切り離すために、沖縄独特の文化を強調した。拙稿「仲原善忠と沖縄史研究—郷土から生まれる歴史観」(『京都産業大学論集人文科学系列』、第47号、2014年、260～7ページ)。
- (96) 柳田国男『海南小記』角川文庫、2013年、85ページ。
- (97) 桂秀実・木藤亮太、前掲書、2017年、234～5ページ。その際、『海南小記』にも『海上の道』にも、あまり稲作の影がないことは重要である。赤坂憲雄『柳田国男を読む』ちくま学芸文庫、2013年、166～8ページ。
- (98) 岡谷公二、前掲書、2016年、36～41ページ。
- (99) 千葉徳爾『民俗学のこころ』弘文堂、1978年、17ページ。
- (100) 岡谷公二、前掲書、2016年、43ページ。

